

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530759

研究課題名(和文) ソーシャルワーク方法理論生成に関する実証研究 - アルコール依存症者の語りから -

研究課題名(英文) Studies to forming the Practice theory of Social Work ;Narratives of alcoholics

研究代表者

稗田 里香 (HIEDA, Rika)

東海大学・健康科学部・講師

研究者番号：30439715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、問題解決に取り組んだ人々の語りやそれを支援したソーシャルワーカーの実践に密着し、継続的比較分析法によって分析した結果「リカバリーの3次元志向構造」というソーシャルワーク方法理論における仮説的核概念を生成した。

この概念を用いた「実践ガイド」を、現任ソーシャルワーカーらが試行し評価することによって既存の方法理論を脱構築し、より実践に則した方法理論を再構築した。その結果を、一般医療機関のソーシャルワーカー向けの支援ガイドとして「アルコール依存症者のリカバリーを支援するソーシャルワーク実践ガイド 一般医療機関によるアウトリーチ(早期発見・早期治療)のための支援地図」にまとめた。

研究成果の概要(英文)： This study, hypothetical in social work method theory of "three-dimensional oriented structure of recovery" As a result of close contact with the practice of social workers who support them and spoke of people who worked on problem-solving, and analyzed by continuous comparative analysis method I generated the core concept.

The deconstruction how existing theory by evaluating incumbent social workers and others attempt, using this concept the "Practical Guide", was to rebuild the way theory conforming to practice more. I summarized in "social work practice guide to help recovery of alcoholics" as support guide social workers for general medical institution, the results.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：アルコール依存症者 リカバリー ソーシャルワーク方法理論 語り 継続的比較分析法 実践ガイド

1. 研究開始当初の背景

本研究は、従来、接近困難とされていた社会的な援護を必要とする人々が、直面する複雑で深刻なデマンド解決過程を支援する際に役立つ有効なソーシャルワーク方法理論の生成を目的とする。そのための研究対象として、アルコール依存症者のデマンド解決過程とその過程に介在したソーシャルワークによる支援に焦点化している。その背景は次の通りである。

日本では、近年、家族の変化や企業のリストラなど、大都市を中心に社会全体の包容力が低下する中で、貧困、低所得者問題、借金問題、虐待、ドメスティックバイオレンス、引きこもり、自殺、孤独死など新たな社会問題が出現している（厚生省（現厚生労働省）報告書『社会的援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会』厚生省社会援護局、2000）。このような深刻な問題を引き起こす、あるいはそれらの問題を複雑化し解決を困難にする要因の一つに、アルコール依存の問題が密接に関係していることは、様々な領域の報告書等で明らかとなっている（例えば、生活保護受給者の社会的な居場所づくりと新しい公共に関する研究会『生活保護受給者の社会的な居場所づくりと新しい公共に関する研究会報告書』2010、内閣府『平成21年版 自殺対策白書』2009など）。その実情は、アルコール依存症予備群と言われる大量飲酒者が推計で約400万人、その内アルコール依存症と診断され治療を受けている者は約82万人、未治療者の平均寿命は52歳、飲酒問題に関連した経済的損失は約6兆円である。また、働き盛りの中高年だけではなく、近年では、若年者、女性、高齢者のアルコール依存症者が増加傾向にある（樋口進「アルコール依存症治療の現状と将来の展望」『精神神経学雑誌 109号第6巻』2007、534-535頁）。アルコール依存の問題が人々の社会生活を危機的な状況に陥れることに

ついては、国際的にも危惧されるところである。世界保健機関(WHO)は、2005年に「アルコールの有害な使用に起因する公衆衛生問題」を勧告後、今年(2010年)になってアルコール関連問題を10領域に分類し、各領域の説明、政策、措置等を指針とする「アルコールの有害な使用を低減するための世界戦略(Strategies to reduce the harmful use of alcohol:draft global strategy.World Health Organization,2010)」を採択した。日本では、アルコール依存に関わる市民活動団体や関連学会等が国際的な機運の高まりにいち早く呼応し、国内におけるアルコール依存の問題解決に向け今後どう取り組むべきか本腰を入れて検討し始めたところである。

このような背景から、アルコール依存症者の複雑で深刻なデマンドを解決するために、包括的、統合的支援としてソーシャルワーク支援の必要に迫られている社会的現状があることは言うまでもない。人々の日常生活と生命をも脅かす社会問題を解決することは、ソーシャルワークの使命であり、ソーシャルワークが対応すべき喫緊の課題である。しかしながら、日本においては、アルコール依存症者の場合に象徴されるように、複雑で深刻なデマンドは遷延化し支援の対象になりにくい現状にある。さらに、支援するソーシャルワーク実践と理論とが乖離するだけではなく必ずしもその乖離を埋めてこなかった現実から、必要に応え得るソーシャルワーク方法理論がいまだに確立されていない課題がある。

本研究は、以上の課題を見据え、経験知のレベルにとどめてきたソーシャルワーク実践を理論化する方法を検討してきた。実践と理論との乖離を埋める取り組みとして成果を挙げている先行研究では、例えば、医療ソーシャルワークの退院援助の実際を継続的比較分析法(修正版グラウンデッド・セオリ

ー・アプローチ)を駆使して調査することで医療ソーシャルワーカーによる退院援助をモデル化した三毛美予子(『生活再生にむけての支援と支援インフラ開発 - グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく退院援助モデル化の試み - 』相川書房)の研究や、大学教育も含め分析し、実践場の苦悩と困難が混在する課題への対応とソーシャルワーカーの実践力の脆弱性と存在意義、社会福祉制度が含有する矛盾等を含めて検討し、日本国内とカナダでの合同研究を通じクリティカル・ソーシャルワークの視点から内省的思考と脱構築分析の方法を提示し専門職アイデンティティ確立に寄与した北川清一ら(『演習形式によるクリティカル・ソーシャルワークの学び - 内省的思考と脱構築分析の方法 - 』中央法規)の研究などに着目してきた。その結果、継続的比較分析法を用いて研究を進めていくことの必要性を認識することとなった。なお、現在、国際的に認知されているオリジナル版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるアクション・リサーチの方法を日本に分かりやすく紹介した志村健一(「(講座)グラウンデッド・セオリー / 1~4」『ソーシャルワーク研究』第34巻、第1~4号、相川書房)によるスーパーヴィジョンの下、ライフストーリー・インタビューによって得られたアルコール依存症者のデマンズの解決過程とソーシャルワーク支援過程のデータに関する分析に着手したところである。

2. 研究の目的

(1) 新たなソーシャルワーク方法理論の生成

従来、接近困難とされていた複雑で深刻なデマンズの解決方法をアルコール依存症者の語りを手がかりに可視化し、そこに介在するソーシャルワークの有効性を検証することによって、具体的なソーシャルワーク方法

理論の生成を試みる。

(2) 生成したソーシャルワーク方法理論の有効性の検証

仮説的に生成したソーシャルワーク方法理論を基に、現任ソーシャルワーカーが活用できる「支援ガイド(仮称)」を開発し、同ガイドを試行することで有効性の検証を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、大別して3段階で実施する計画である。

第1段階:

ライフストーリー・インタビューによって、アルコール依存症者のデマンズの解決過程とその過程に介在したソーシャルワーク実践過程を可視化する。そのデータを継続的比較分析法で分析し、文献研究によってソーシャルワーク方法理論の生成を試みる。

第2段階:

生成した実践理論を基に、現任ソーシャルワーカーが活用できる「支援ガイド」を開発する。

第3段階:

現任ソーシャルワーカーを対象に、「支援ガイド」を試行する実践的なワークショップを開催し、活用の効果を現任ソーシャルワーカーとともに評価し、より実践に役立つソーシャルワーク方法理論を再構築する。

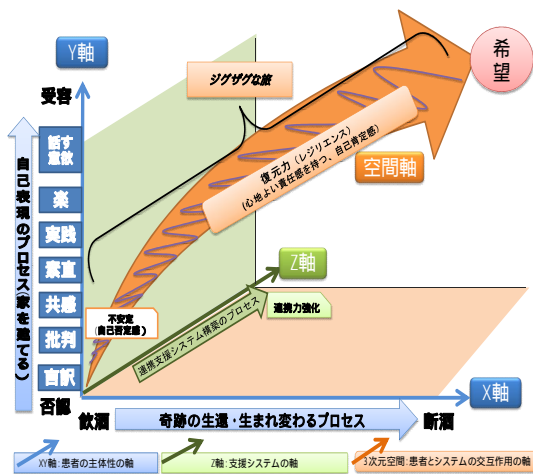
4. 研究成果

(1) 平成23年度は、すでにライフストーリー・インタビュー法によって収集したアルコール依存症者のデマンズの解決過程に関するテキストと、そこに介在したソーシャルワーク実践の支援過程を記録したケース記録をデータ化(可視化)した。

これらのデータを、全7回(うち1回は宿泊研究)の研究会を通して、継続的比較分析法(オリジナル版グラウンデッド・セオリー)によって分析した。具体的には、オープンコ

ーディングを実施して浮上した94のコンセプトを生成しながら、理論メモを作成した。また理論メモの作成において、一枚の理論メモを作成する過程で新たな理論メモが作成される体験を共有した。これらの分析を通して、ソーシャルワーク方法理論を生成すべく、「リカバリーの3次元志向構造(図1)」とする理論的飽和に至り、これを、仮説的核概念と捉えることとした。

図1 リカバリーの3次元志向構造



この構造が示す、アルコール依存症のリカバリーは、患者の主体性の軸として「奇跡の生還・生まれ変わるプロセス(X軸)」、「自己表現のプロセス(Y軸)」、支援システムの軸として「連携支援システム構築のプロセス(Z軸)」と、X、Y、Z軸の相互作用の軸として「復元力の強化のプロセス(空間軸)」の3次元構造からなる。

X軸は、飲酒行動にかかわる人生の物語です。飲酒から断酒へと依存症を患う人自身の行動が変化する旅を意味する。死を意識するほどの「どん底」経験から生きる「希望」を持てるようになるまでの変化の旅を【奇跡の生還・生まれ変わる】と表現している。

Y軸は、依存症を患う人自身が、否認から理解・受容へと自己表現が変化する旅である。旅をしながら、自分にとって居心地のいい【家を建てる】と表現される体験を示す。

Z軸は、システム(機関、組織など)が、適切な支援を提供できる応答性の質が高いシステムへと変化する過程を示している。

空間軸は、X、Y、Z軸のすべての相互作用の中で、専門的支援関係や家族、仲間関係において信頼関係が醸成され【行きつ戻りつ(ジグザグ)】な旅をしながら自己否定から自己肯定へと変化し復元力(逆境を乗り越える力)を強くし「希望」ある人生とする旅を示している。

また、この核概念を可視化するために、東海大学情報通信学部情報メディア学科濱本研究室より、具体的な理論、スキル、方法などについてコンサルテーションを計4回受けながら、構造化の実現を目指す手掛かりを得た。

これらの研究と並行して、アルコール依存症者が患う病いの意味と本質的な課題を捉えるために、哲学の専門家、社会福祉学の研究者、社会福祉実践現場のソーシャルワーカーよりコンサルテーションを受け、客観主義、社会構成主義について知見を得ながら、アルコール依存症の患いについて文献研究を中心に問い考察を深めた。

(2)平成24年度は、実践の理論化とソーシャルワーク実践方法の開発と「支援ガイド」の作成に向けた、ソーシャルワーク実践における仮説的理論の生成に取り組んだ。

具体的には、平成23年度にライフストーリー・インタビュー法によって収集したアルコール依存症者のデマンドの解決過程に関するテキストと、そこに介在したソーシャルワーク実践の支援過程を記録したケース記録をデータ化(可視化)し、分析した結果浮上した「リカバリーの3次元志向構造」というソーシャルワーク方法理論における仮説的核概念の妥当性を検証した。

検証方法は、アルコール依存症者への支援に精通したベテランの現任ソーシャルワーカーの4名とアルコール依存症からの回復を経

験している当事者2名の協力を得て、実践の聞き取りや現場の参与観察、当事者の回復ストーリーなどをデータ化し継続的比較分析法によって分析しながら、核概念の妥当性を確認した。それらの検証と並行して、核概念(リカバリーなど)に関する文献研究を行い、ソーシャルワーク支援理論を生成することに取り組んだ。

(3)

平成25年度は、「支援ガイド」の試行とソーシャルワーク方法理論の再構築が目的である。

平成24年度に引き続きクリティカル・ソーシャルワークにおける脱構築分析法に依拠しアルコール依存症者への支援に携わる現任ソーシャルワーカーを対象に、作成した「支援ガイド」を試行するワークショップを開催した(三重県四日市市、北海道札幌市の2か所)。具体的には、アルコール依存症者への支援事例を用いて、参加するソーシャルワーカーが、「支援ガイド」を理解したうえで、同ガイドを活用した実践について模擬的に体験し、その効果を、参加者に対して行うリサーチクエスト法とグループフォーカスインタビュー法によって検証した。その結果を分析し、文献研究を行いながら、既存の方法理論を脱構築し、より実践に則した方法理論を再構築した。

その結果を、支援ガイドとして「アルコール依存症者のリカバリーを支援するソーシャルワーク実践ガイド 一般医療機関によるアウトリーチ(早期発見・早期治療)のための支援地図」にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔図書〕(計1件)

アルコールソーシャルワーク研究会(代表稗田里香)、アスク編集、アルコール依存症者のリカバリーを支援するソーシャルワーク実践ガイド 一般医療機関によるアウトリーチ(早期発見・早期治療)のための支援地図、2013、42

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稗田 里香 (HIEDA, Rika)
東海大学・健康科学部・講師
研究者番号: 30439715

(2) 研究分担者

北川 清一 (KITAGAWA, Seiichi)
明治学院大学・社会学部・教授
研究者番号: 50128849

(3) 研究分担者

志村 健一 (SHIMURA, Kenichi)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号: 20265119

(4) 研究分担者

稲垣 美加子 (INAGAKI, Mikako)
淑徳大学・総合福祉学部・教授
研究者番号: 30318688